その一歩が世界を変える

福井工業高等専門学校　3 年　齋藤　優成

私たちは立ち上がる必要がある。SDGs が掲げる貧困、教育格差、気候変動などの問題は、「誰かがなんとかしてくれる」と待っているだけでは解決しない。重要なのは、完璧である必要はないということだ。食品ロスを減らし、公正な労働を支援し、どんな小さな行動でも、SDGs の理念に沿った自分なりの一歩を踏み出すことが大切だ。その一歩が、同じ思いを持つ人々との出会いを生む。

駅のホームで電車を待っていた時のことだった。向かい側のベンチに座った高齢の女性が、重そうな荷物を持ち上げようと苦労している姿が目に入った。周りの人々は皆、スマートフォンの画面に夢中で、その光景に気づいていないようだった。私も最初は「誰かが助けるだろう」と思いながら、なんとなく視線を逸らしていた。

しかし、その女性の困った表情を見た瞬間、何かが心の中で動いた。私は迷いながらも、ゆっくりと立ち上がり、その女性に声をかけた。「お荷物、お持ちしましょうか？」女性の顔に安堵の笑顔が浮かんだ。すると、私の行動を見た近くの男性が「私も手伝いましょう」と声をかけてくれた。さらに、別の女性も心配そうに駆け寄ってきた。わずか数分前まで無関心だった人々が、突然温かい共同体に変わったのだ。

この体験から、私は「その一歩」の真の力を理解した。世界を変える力は、大きな革命から生まれるのではなく、日常の中での小さな勇気ある行動から始まる。周囲の人々の心を動かし、社会全体に波紋を広げていくのだ。

歴史を見ても、世界を変えた偉大な変化の多くは、一人の人間の小さな決断から始まっている。ローザ・パークスがバスの座席を譲ることを拒否した行為は、アメリカの公民権運動の転換点となった。彼女の「その一歩」が、何百万人もの人々の心を動かし、社会制度そのものを変えていった。

現代においても、この原理は変わらない。2015 年に国連で採択された SDGs（持続可能な開発目標）も、この「一歩の積み重ね」の重要性を示している。17 の目標は壮大に見えるが、実際には一人ひとりの行動から実現される。

環境問題を例に取れば、一人がプラスチックストローの使用をやめる決断をする。その行動を見た友人が同じ選択をし、さらにその輪が広がっていく。企業もこの変化を察知し、環境に配慮した製品の開発を始める。やがて、一人の小さな選択が業界全体の方向性を変え、SDGs の目標 14「海の豊かさを守ろう」の実現につながっていく。

同様に、フェアトレード商品を選ぶことで目標 1「貧困をなくそう」に貢献できる。

SNS の普及により、この「一歩のカ」はさらに加速している。気候変動に対する若者の活動や、社会的不平等への抗議活動も、最初は一人の声から始まっている。 -

しかし、その一歩を踏み出すことは簡単ではない。「自分一人が行動しても何も変わらない」という諦めや恐れが私たちの前に立ちはだかる。